存在の平等と持ち味や能力の違いを認め一人ひとりが際立つ授業を

文教大大学院教育学研究科長　嶋野道弘

これからの社会を生きる子どもたちに、小学校はどのような指導や支援によって、自己肯定感を高めていくとよいのだろうか。社会の変化を踏まえ、今後、学校として、教師として心掛けたいポイントを、文教大大学院の嶋野道弘教授に整理してもらった。

◉現状と将来の展望

前向きな気持ちは「かかわり」の中から生まれる

今も昔も、そしてこれからも、子どもだからこそ持ち得る夢や希望、前向きな気持ちがあり、それは純粋で無邪気で、子ども特有のものです。今の子どもが、それらを持てなくなったということはないでしょう。ただ、持ちにくくなったようには思います。

背景には社会の変化があります。今の日本では、昔に比べれば物質的に恵まれ、情報もすぐに手に入るようになり、生活のあらゆることが便利になりました。「便利」は言い換えると「省略」になります。例えば、以前は電車に乗るためには、行き先までの料金を調べ、切符を買い、駅員に見せる必要がありましたが、今はカードを機械にかざすだけで乗車できます。いくつもの手続きを省略することによって便利になっているわけです。

社会がどんどん便利になっていく中で、人やモノとかかわり、体験をする機会がいっそう少なくなると予想されます。かかわりが減れば、感じ、考え、判断し、感謝したりすることが少なくなります。そうした状況は、子どもの思考力や感性、また夢や希望を育む上では、マイナスに働いているのです。

例えば、生活科の授業で、自分でまいた種が発芽すると、「ぼくがまいたから芽が出た」と子どもが言います。これは、自分がかかわったことで対象に変化が起こり、それによって思考や感情が動いているのです。

また、花屋を訪れた時、お店の人から「小さい頃から花が好きで花屋になりたいと思っていた」という話を聞いた子どもが、「夢を持つのはいいことだなあ。僕も夢を持ちたい」と言っていました。夢や希望は、人やモノとかかわって「すてきだな」などと感じることから生まれます。

子どもが夢や希望を持ち、自己を確立できるように、人やモノとかかわり合う体験の大切さを今一度、見つめ直す必要があるように思います。そして、そうした機会を学校教育の中に意図的に設けていくべきだと思います。

教育には、不易と流行があります。子ども

授業で高める自己肯定感

の自己肯定感を高めることは、いわば不易です。一方、社会の変化（流行）に伴い、教育内容や質を変えていくことも求められるのです。

これからの社会では、グローバル化が進み、価値観がますます多様になります。その中で、自分を見失わないためには、自分をしっかり持ち、自分の存在を尊いと思うことが出来る自己肯定感がますます大切になるでしょう。

◉授業で高める自己肯定感

持ち味に合った役割を持たせることで自己肯定感を高める

では、子どもの自己肯定感を高めるにはどうすればよいのでしょう。まず、授業のあり方を検討してみる必要があると思います。一斉授業は基本となりますが、一方で「一人ひとりが際立つ授業」をもっと心掛けていくべきだと思うのです。これは、子ども一人ひとりが存在感を発揮しながら、クラスみんなとかかわる授業のことです。

そうした授業を実現させるためには、存在の平等と、持ち味や能力の不平等を認めることが大切です。まず、一人ひとりの子どもがクラスの一員であり、そこに存在することにおいては平等でなければなりません。一方、持ち味や能力には歴然とした違いが出ます。そうした違いをしっかり認めましょう。持ち味や能力の不平等を認めることは、個を尊重して、存在の平等をはっきりさせることにつながります。近年、個の尊重に関しては、全国で良い例が増えていると思います。子どもをよく捉え、子どもを理解し、適切な指導をするという「共感の教育」の広がりが見られます。

「共感の教育」で大切にしたい３つのポイントがあります（**図1**）。１つめは子どもに「そうそう」と共感すること、２つめは「なるほど」と納得すること、そして、３つめは子どもに「おやおや」「あれあれ」と驚くことです。こうした言葉がたくさん飛び交う授業は、とてもよい雰囲気です。子どもは、自分の考えに相手が共感したり、納得したり、驚いたりすることや自分がそうさせたことをうれしく感じ、自信を持ちます。

また、特別活動や係活動も、自己肯定感を高める上で重要な役割を果たします。こうした活動を通して子どもに持たせたい感情とし

しまの・みちひろ◎埼玉県公立小学校教諭、文部科学省初等中等教育局主任視学官などを経て、現職。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間専門部会委員。著書に『子どもの心を動かす親と教師の"語りかけ"』（明治図書出版）など。

図1　共感の教育の３つのポイント

1. 「そうそう」＝共感
2. 「なるほど」＝納得
3. 「おやおや、あれあれ」＝驚き

この３つの言葉が飛び交う授業では、子どもが前向きに学んで自信を深める

＊嶋野教授の資料を基に編集部で作成

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

て、私は、自分は役に立っているという「自己効力感」を挙げたいと思います。

子どもが自己効力感を持つ状況は2つあります。1つは結果に期待しているときです。「うまくいきそうだ」「（競技などに）勝てそうだ」といった結果への期待を持つと、子どもはがぜん意欲的になります。

もう1つは、結果はともかくとして、「自分は関与できそうだ」「自分は役に立てそうだ」といった関与と効力への期待を持つと、やはり意欲が高まります。例えば、体育の時間で、けがをして試合に出られない子どもが、記録係を任されたとしましょう。チームのために一生懸命に記録して、友だちから「しっかりと記録してくれたから、よい作戦を立てられた。ありがとう」と言われれば、自己効力感は高まります。そのように、個々に合った役割を与えてやりがいを持たせることは、存在の平等と持ち味や能力の不平等を認めて、一人ひとりを際立たせることに他なりません。

◉子どもとのかかわりで心掛けたいこと

「優しい先生」を超え「ありがたい先生」を目指す

自己肯定感を高める観点から、教師は子どもにどのようにかかわればよいのかを考えてみましょう。

新課程では、体験活動や言語活動が重視されています。直接体験したことを言葉で表現するのは、子どもの自己肯定感を高めるためにはとても有効です。特に、言葉に置き換えることによって体験の意義が大きくなることがよくあります。

ある小学校でのことです。体育の授業でボールゲームに負け続けているチームがありました。そのチームが頑張って練習し、初めて勝った時に、子どもから「今日は記念日だ」という言葉が出てきました。私がその場面で感じたのは、「勝った記念日」であると同時に、「これからも勝てるという可能性を見付けた記念日」「自分たちに自信を付けた記念日」でもあることです。それを子どもたちに伝えれば、より自信を付け、自分たちの可能性の大きさを意識するようになるでしょう。

教師は、子どもの言葉や行動や表情を拾い、意味付けたり価値付けたりすることが大切です。もちろん全部を拾えるわけではありませんが、出来るだけ逃さないように心掛けたいものです。例えば、子どもの発言だけではなく、それを聞いている子どもの姿やつぶやきにも注意して、「どうして『なるほど』と言ったの？」と聞けば、クラス全体に思考の輪が広がっていくでしょう。そのような授業を続けていくうちに、「学びを実感し合う学級」が出来るはずです。

こうしたかかわり方は、「優しい先生」を超えて、「ありがたい先生」になることにもつながります（**図2**）。ありがたい先生は、優しい上にきちんと子どもを育てます。例えば、優しい先生は、「いいね」「すごいね」「がんばって」と褒めたり励ましたりします。一方、ありがたい先生は、「何がいいのか」「何がすごいのか」「何をがんばればいいのか」をきちんと伝えます。また、優しい先生は「これはこうですよ」と丁寧に教えますが、ありがたい先生は「それならこうしたら」と子どもの気持ちをくんで教えます。そうした指導により、子どもは自分を肯定的に捉えて、自信や意欲を付けていくのです。

図2　「優しい先生」と「ありがたい先生」

優しい先生	ありがたい先生
「いいね」 「すごいね」 「がんばって」	「○○がいいね」 「○○がすごいね」 「○○をがんばって」
褒めてくれる 励ましてくれる	具体的に褒めてくれる 具体的に励ましてくれる
花丸 コメント	アンダーラインと花丸 気持ちをくんだコメント

＊嶋野教授の資料を基に編集部で作成

◉若手教師を育てるポイント

「なぜ」と問う気持ちを持たせ教師の能力を「発揮」させる

私が大学で教師を目指す学生を指導して感

じるのは、多くの学生が真面目で目的意識を明確に持っていますが、生活の中での体験やかかわりが少ないことです。前述の子どもの現状と共通しており、そのまま教師となった時に、生活知や体験知が低かったり、自己発見や自己認識が弱かったりするといった課題が出てくるように感じています。

また、社会には「ハウツー（How to）」の情報があふれ、「なぜ（Why）」と考えない傾向が見られます。教育の場面でも、ハウツー情報はすぐに使えますし、一定の指導レベルに達するという良さはありますが、Whyという気持ちを持たなければ、一人ひとりの子どもを深く理解することは出来ないでしょう。

そこで、若手教師に接する時には、「なぜ」「どうして」と質問したり質問させたりするとよいと思います。例えば、「なぜ、そこに絵を掲示したのか」と尋ねれば、漫然と掲示していた自分に気付くきっかけになるはずです。ノートに花丸を付けていたら、「どうして花丸なのか」と聞いてみてください。また、「あの先生は、良い部分にアンダーラインを引いて花丸を付けている」などと教え、子どもの受け止め方や子どもへの返し方の違いを考えてもらうのもよいでしょう。教師の中にWhyの気持ちが芽生えれば、自然とベテラン教師の指導の深さに気付いたり、自ら勉強したりするようになるでしょう。

私は、よく使われる指導力の「向上」という言葉は、「自分たちに力がないから伸ばさなくてはならない」と重荷に感じられるように思います。それを「発揮」という言葉に置き換えて、若手の先生にも「指導力を発揮してください」と声を掛ければ、「自分の得意分野や持ち味を表に出せばいい」といった前向きな捉え方が出来ると思います。

◉家庭や地域との連携
家庭や地域とのかかわりが子どもの体験を豊かにする

子どもの自己肯定感は、学校だけでなく家庭や地域と共に高めていくものです。

家庭で大事にしたいのが、声掛けです。親子間では言葉がなくても分かり合えることが多分にありますが、言葉を使った方がコミュニケーションが深まります。ちょっとした手伝いでも、「ありがとう」「助かるよ」と感謝の気持ちを表現されれば、子どもは「自分は役に立っている」という実感を得られます。

地域社会でも同じです。近所に住んでいる人が子どもに「学校、がんばってね」と声を掛けてくれたら、それは子どもにとって「かかわり」となります。子どもが潜在的に人とのかかわりを求めていることを忘れないでいただきたいと思います。

日本は、基本的に学校中心の文化だと思います。特に、小学校は地域社会と深くつながっています。今後は、コミュニティースクールに取り組むなど、地域に向けて更に開いた学校づくりを進めていくのもよいのではないでしょうか。地域の人々に協力を求めると、こちらが驚くほど熱心にかかわってくださることがよくありますし、地域社会におけるボランティア活動も、子どもが自分の存在意義を感じられる点で大きな意義があります。

校長先生をはじめとした管理職の先生方は、一人ひとりの教師の持ち味や能力を「発揮」させることを心掛け、学校全体で子どもが意欲的にかかわる授業づくりを進めていただければと思います。

特集取材を終えて

自分に自信がない子どもが増えた、夢を持ちにくい社会になっている……そうした言葉を受けて、今回の特集では「自己肯定感」を取り上げたいと思いました。自分を大切に思う気持ちがあってこそ、人の役に立ちたい、そのために学びたいという意欲につながると考えたからです。取材を通して、よい意味で裏切られたのは、子どもに自信を持ってほしいと実践に当たられる先生から「最近の子どもは自己肯定感が低くなった」という言葉が全く聞かれなかったことです。共通していたのは、子どもが本来持ち備えている感情（自己肯定感）を、授業で、友だちや先生とのかかわりの中でどう高めるか、発揮させるかという前向きな言葉でした。子どもの持つ力を信じて任せ、認め合う授業や学級づくりの参考にしていただけたら幸いです。

VIEW21編集部　杉田美穂